◆　第四話　念佛橋（ねんぶつばし）　（昭和２９年８月２０日掲載）

たとえ、貧乏のため、どうにも致し方なかったとは云え、都に出て、一儲けしようとした自分が浅ましくてならないのだ。金持ちになったかと云えば、そうではなく着のみ着のままの服装をしている浅ましい姿だった。

俊作の心は、懐かしい故郷が近づけば近づく程、後悔の為に胸が一杯になっていた。あんなに可愛い妹を捨てて、どうして都へ旅立つ決心をしたのだろうか、もうあれから十年にもなる。

妹と別れた時の思い出を、目の前で走馬灯のように馳せめぐらした。

一時の腹立ちまぎれとは云いながら、そでにすがり泣いて止めた好意を、塵芥のようにすてて、都に旅立った。ただ貧乏がつらく都に出て一儲けしようという事ばかり考えて、妹と喧嘩別れをしたのであって見れば、自分からおめおめと顔を会わせた義理ではなかった。

あれほど仲の良かった妹であったが、果して今でも自分の帰りを待っていてくれるだろうか。可愛いい顔かたちや姿を思い浮かべて懐かしくなっていた。両親に早く死に別れて、たった一人の妹であって見れば、勝気な妹が時には母のように感じられるのであった。

俊作は不図立ち止った。それは山国川にかかっている、ささやかな橋のたもとである。ここで妹の顔を見おさめ、自分の決心を披れきして、別れたのである。そういう因縁のある橋である。そこから川面を眺めると、自然の美しさ、渓流の清らかさに魅せられて、身も心も奪われるのである。

丁度その時、渓流の真っ只中が一寸暗くなったかと思うと、思わず目を見張らずにはいられなかった。

「おお・・・・・・。」

瞬間、吠え立つように叫ぶなり、釘づけにされたように突っ立った。

「香代ちゃん、香代ちゃん。」

妹の顔がはっきりすると、俊作はこう叫んだ「逢いたかった。逢いたかった。」

著しく着飾った妹は、身動きもせず、さめさめと泣くのであった。その涙が雨となって、渓流に落下するようにある。

「兄さん」と涙にうるんだ目をあげて、俊作の顔をまざまざと見つめた。その顔は、透き通ったロウのようで、青ざめて、とてもこの世の人とは思われなかった。夢のような心地がして、暫く我を忘れてぼんやりしていたが、球に一抹の不安を感じながら、家路をさして急いだのであった。

貧しい乍ら、妹と一緒に暮らした家は、軒さえ、昔のままに半ば朽ち果て、井戸端の柿の木は、枝もたわわに実を熟れこぼしていた。秋の陽が、地上一面にはっきり輝いていた。俊作は玄関から中に入った。

不図、仏間の方からリンの音が聞こえて、耳をすますと読経（どきょう）が聞こえてくる。不吉な予感に身を震わして「どなたかの御法会でも」とロクロク挨拶もせず、白髪の老人にこう話しかけた。それはこの付近の教順寺の老僧であった。

「俊作さん、今日は丁度お香代の三年忌。それにしてもよくよく因縁の深い日です。まあゆっくりして、称名の一つでもあげて下さい。」と神々しい言葉でこう云った。俊作の顔は見る視る青ざめて来た。「ええ、それではやっぱり香代ちゃんは死んだのですか。」と云い、それにしても何と云う不思議であろう。たった今逢った妹の亡霊は自分を出迎えたものであろうか。

「一心に思いつめた魂と云うものは、永遠に消滅するものではない。何時か必ずそのような姿をあらわすものである。けれど只一つ御仏の功力によってのみ、その御霊は昇天するものである。つまり現世から来世への橋渡しの役目をして進じよう。」と云って、老僧は俊作を伴なって、念仏を称えるために橋へ引き返した。

丁度俊作が香代の亡霊を見た橋の中央に、両人は静かに並んで立った。老僧は懐中から一巻の経本を取出して、声おごそかに読経した。その声は朗々として、岸壁と渓流の調和した、自然の景観をゆさぶるように感じられた。

そして最後の一章がまさに終わらんとする刹那、絹を裂くような女の悲鳴が鋭く聞こえ、同時に渦巻く渓流の真っ只中に、さっと水煙が立ち昇った。

「さあ、俊作さん安心しなさい。故人の御魂は昇天しました。」と云う老僧の言葉に、俊作はそそとした姿の妹の昇天する姿を見出した。何たる静けさ、何たる気高さであろうか。

感極まった俊作は「南無阿弥陀仏」と念仏をとなえて、そこに釘付けされ、後に仏門に帰依したと云う事である。（完）

益永嘉之画